

十月三日(月)
第一夜 能講座

- 一、開会 あいさつ
梅若猶彦(能楽師・静岡文化芸術大学 文化政策学部 芸術文化学科教授)
- 二、薪能プロジェクト あいさつ
永田みう(薪能プロジェクトチーム代表 芸術文化学科二年)
- 三、学生による 近代能楽集「卒塔婆小町」(三島由紀夫著)のストーリー解説
薪能プロジェクトチーム
- 四、朗読劇 近代能楽集「卒塔婆小町」(三島由紀夫著)
演劇活動サークル ecrj (エクリュ)

静岡文化芸術大学の学生を中心に、主に現代劇の公演を行っている

主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
運営：静岡文化芸術大学薪能プロジェクトチーム
後援：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、
中日新聞東海本社、静岡新聞社・静岡放送



ご挨拶

さる七月、本学の「薪能プロジェクトチーム」代表の永田みうさんの訪問をうけました。このチームはアートマネジメントを実践の中で学んでいます。「このたびの曲はソトワコマチに」と永田さん。同行の梅若猶彦先生は後見しながらの無言。「そうですか」と私。ただ心中でつぶやいておりました。老女ものは奥の曲、そのまた奥の……と。

振り返れば、本学の公開講座「薪能」は、開学二年目の二〇〇一年、「船弁慶」に始まり、一九年の新作能「竜宮小僧」まで続きました。県内外のご支援あつてのこと。それが二〇年から新型コロナウイルス蔓延にはばまれ、雌伏二年。ようやくこの夏、風が動きました。講座再開。しかも「卒都婆小町」で。

時代は激動しています。地球を覆い続ける疫病、ロウテクもハイテクもないまぜに核爆発すれすれに続く戦争、かなり前から天地の荒れかたも違ってきています。老若かわりなく誰もが息をひそめ、自らの盛衰生死に境目なしやと驚き、一刻の重みを感じ直しています。各地に残る小町伝説が今めく時かもしれません。

八月も終わろうとする夕方遅く、思いたつて老小町が近くに庵を結んだと伝わる地を訪れました。大津から京都へむかう逢坂にあった関寺の跡。急な山裾に、九七六年の大地震で倒れた関寺の再建をたすけた霊牛を祀る宝塔が残り、その一丈余の高さとおおらかな膨らみに魅せられて時を忘れました。その先の荒れた小径に足を入れるもすでに暗く、倒れた卒都婆に腰掛けて動かぬ老小町を想いつつ半巡。ようやく国道に降り現代にたち返りますと、入口に小さな看板灯をともし銭湯が。近づけば「小町湯」とありました。

今回がチーム活動の「集大成」と引札にもありますように、梅若教授は来春に定年を迎えられます。この希有なシテ方と私たちがキャンパスを共にしてきたことの意味をあらためて考える時をむかえます。そう、型を極めつつも、世界の演劇の根底にあるものを求めてやまない自由で大胆な精神がすぐそばにあったことを。

梅若マドレーヌさんのご本『レバノンから来た能楽師の妻』を読みつつ、私も思いを深めておきます。



静岡文化芸術大学
学長 横山俊夫

近代能楽集 「卒都婆小町」

あらすじ

夜の公園に、煙草を啜えた老婆と酔っ払いの詩人がいる。老婆はかつてその美貌を轟かせた小野小町であるが、現在はその見る影もない。二人は話し込むうち、詩人は老婆に八十年前の話をしてほしいと頼む。そこから、夜の公園は華やかな鹿鳴館に変わる。老婆は美しくなり、詩人は次第と……。

指導教員紹介

梅若 猶彦（うめわか なおひこ）

静岡文化芸術大学文化政策学部芸術文化学科 教授



〈略歴〉

昭和三十三年大阪府箕面市生まれ。能楽師であった父、梅若猶義から手ほどきを受け、父の死後は伯父の二世梅若万三郎に師事する。三歳のとき仕舞「猩々」で初舞台を踏み、九歳のとき「土蜘蛛」で初シテ、十三歳のとき初面で「石橋」のシテを務める。その後、乱、道成寺、実盛、翁、松風（見留）、朝長、屋島（大事）、隅田川、融（十三段）、安宅（瀧流）、望月、戀重荷、正尊、求塚等のシテを演じる。ロンドン大学ローヤルホロウェイ校で修士課程を経て、博士課程修了、PhD取得。二〇〇八年まで同大学で客員教授を務めたのち、一九九五年から一九九七年まで、国際日本文化研究センター共同研究員を務める。現在は、フイリピン大学テイリマン客員教授、静岡文化芸術大学教授。

十月六日(木)

第二夜 能公演

第二〇回 静岡文化芸術大学薪能

日時：十月六日（木曜日）十八時開演
会場：静岡文化芸術大学 出会いの広場（雨天講堂）

解説

卒都婆小町

永田みう（薪能プロジェクトチーム）

新作狂言

カラスの恩返し

シテ 井上松次郎

アド 鹿島俊裕

後見 今枝郁雄

脚本 道理洋華（国際文化学科三年）

加筆 梅若猶彦

協力 井上松次郎

仕舞

土蜘蛛

土蜘蛛の化身

観世鍔之丞

地謡

泉 雅一郎

源 頼光

赤松 禎友

梅若長左衛門

井戸 良祐

休憩15分

火入の儀

横山 俊夫

小野小町 梅若 猶彦

能

卒都婆小町

高野山の僧

福王

和幸

従僧

村瀬 慧

大鼓 大村 滋二

小鼓 荒木 健作

笛 藤田 次郎

後見

梅若 堯之

赤松 禎友

吉沢 旭

井戸 良祐

地謡

鶴 克彦

梅若長左衛門

水田 雄悟

観世 鍔之丞

山中 雅志

味方 玄

新作狂言「カラスの恩返し」

あらすじ

ずる賢いカラスに畑を荒らされ、食べ物もなくお金もない男は途方に暮れていた。そこにカラスが男の頭上に糞を落としていく。しばらくすると、男は動けなくなっているカラスを見かけた。腹を立てていた男は、石を手にとると殺そうと試みる。しかし、男はどうしたことかカラスを助けてしまう。その晩、男が家に一人でいると、カラスの化身だと名乗る者が御札を述べにやって来る。こうして男とカラスの化身による宴が始まるのであった。

能「卒都婆小町」

あらすじ

高野山の僧の一行は、都に向かう途中乞食姿の老婆が卒都婆に腰かけているのを見つける。卒都婆は神聖なもののため、僧は立ち退かせようと説教を始めるが、老婆は逆に僧を説き伏せしてしまう。感服した僧が老女の名を尋ねると、なんとかつて絶世の美女として知られた歌人、小野小町その人であった。小町は、美貌を誇った過去の栄華と、現在の乞食としての憐れな生活を嘆き狂乱状態になる。このとき小町には、かつて自分を恋慕した深草少将の怨霊が憑りついていたのであった。